



緑の涙



夕暮れの木



この色がなくなる前に



紫の淵

旧藏内邸 夏の企画展

ろう ぞ 蠟染めの世界 岡田真美子 作品展

水の力をかりて、布にみずみずしい染め色をのこしたい

2025年6月26日(木)～8月26日(火)

【会場】国指定名勝 旧藏内邸 築上町上深野396 ＊水曜休館

【時間】9:30～16:30 【入場料】一般 310円 小中学生 100円

【主催】築上町教育委員会 【問い合わせ】旧藏内邸(電話0930-52-2530)

この印刷物は築城飛行場関連再編関連特別事業で制作しました。

アートな夏！
楽しい思い出づくり

事前申込不要
開催時間内にお越しください

参加費200円
(別に入場料が必要)



押し花体験

押し花作家 新堂眞智子氏

押し花アート作品制作を体験します。

【日時】7月27日(日)10:00～15:00

応接間等で新堂氏の押し花作品を展示中

染色体験

染色作家 岡田真美子氏

真っ白のハンカチを染色し
世界で一つだけの作品を作ります。

【日時】8月24日(日)11:00～15:00



どちらの体験も完成した作品はお持ち帰りいただけます。
どちらも準備した材料がなくなりしだい終了します。

華やかな色彩と生命力あふれる筆致。蠟染めの世界へようこそ。

ろうぞ 蠟染めの歴史を振り返る

ろうぞ 蠟染めは、ろうを防染剤に用いる模様染で、熱して液状になったろうで文様を布地に描き、染色した後に熱湯でろうを取り除く染の技法です。蠟染めは古代、藤(蠟) 縵(縵には染めの意味が含まれる)と呼ばれました。

その歴史は古く、中国では2〜3世紀頃から見られ、日本には古墳時代に伝わった可能性が高いのですが、現時点で実例はありません。確実なのは法隆寺の幡(仏堂の荘厳具)に見られる「水玉模様藤(蠟)縵平絹」(東京国立博物館所蔵)で7世紀後半から8世紀初頭、中国から輸入されました。

奈良時代(8世紀)になると、「象木藤(蠟)縵屏風」など正倉院に伝来する藤(蠟) 縵作品のほとんどは国内で制作されるようになりました。正倉院文書には東大寺の造営に関わる役所で藤(蠟) 縵が制作されたことや、「押鴈(蠟) 縵」(文様を刻んだスタンプでろうを置き、防染する方法)が採用されたこと、女性が染め上げに携わったことが記されます。

平安時代(9〜10世紀)に編纂された『延喜式』には、役所に「藤(蠟) 縵手」と呼ばれる藤(蠟) 縵の専門技術者のいたことが記されますが、この頃を境に衰退の一途をたどり、中・近世の染織品には藤(蠟) 縵は全く見られません。遣唐使の廃止により一時的に中国との交易が低調になったことで、防染用の蜜ろう(ミツバチの巣から採れるろう)が入りにくくなったこと、またろうを取り除くのに熱湯を用いるため、熱に弱い植物染料も同時に落ちるといった技術的に困難な条件も衰退した原因の一つと考えられます。

ろうぞ バティックから現代の蠟染めへ

大正時代になり、色持ちが良く、色落ちにくい合成染料が開発され、各種のろうが安価に手に入るようになると、日本で再び蠟染め作品が制作されるようになりました。一方、バティックはインドネシアの伝統的な蠟染め技法で、15世紀前半まで遡る可能性もあり、この技法による染織物をジャワ更紗(カイン・バティック)と呼んでいます。

バティックは木綿や絹などの布地に蜜ろう・木蠟・パラフィンなどの粘度や溶解温度の異なるろうを、染料の種類や模様の違いに応じて防染剤として使い分けます。その伝統的な染色には長い間、植物染料が用いられてきましたが、20世紀初頭以降、合成染料の使用が急速に普及し、生産性が向上しました。現在、世界中の染色作家が伝統的なジャワ更紗をアレンジした創作活動を行っています。

ろうぞ ■ 染色作家 岡田真美子氏と蠟染め

布地にろうを置き、染料を引くことで現れる美しい花々や、力強く根を張る植物の数々。繊細な線とグラデーションにより表現され、その妖艶な魅力は見る人の心を引き付けます。

常に自然の美しさに感動しながら制作に励む作家、岡田真美子氏の見た風景世界をお楽しみください。

染色作家 岡田真美子氏プロフィール

- 1980年 福岡市に生まれる。
- 2005年 大阪芸術大学大学院修士課程修了
2005大阪工芸展 造幣局理事長賞
- 2006年 第4回国際繊維芸術双年展 優秀賞
- 2007年 第25回南日本女流美術展 特選
- 2008年 第26回南日本女流美術展 入選
- 2018年 繊維表現ことはじめ〜ITOBA vol.1 (福岡アジア美術館) 出品
- 2019年 繊維表現ことはじめ〜ITOBA vol.2 (福岡アジア美術館) 出品
- 2021年 工芸都市高岡2021
クラフトコンペティション入選
- 2022年 匠のアート展2022
〜繊維表現いろあそび〜ITOBA vol.4 (九州芸文館) 出品
- 2023年 工芸都市高岡2023
クラフトコンペティション入選

* 蠟染めでは、ろうを塗ることを「ろうを置く」。染料を塗ることを「引く」「差す(挿す)」と表現します。



アトリエで制作に励む岡田真美子氏



ろうを溶解するろう鍋とろうを置く道具



チャンチン(バティックのために開発された線描点描の道具。内部に蓄えたろうをペン先から出して描く。)